戦国乙女/魔刻を絶つ者

蒼海グレンモルト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦国の世で乱世を起こし倒された松永弾正久秀。

彼が羽後（秋田）の山奥で出会った青年と乙女達の話

目次

第一話　決意 ―― 1
第二話　激闘 ―― 6
第三話　想い ―― 16
第四話　すきんしっぷは大事です… ―― 24

第一話　決意

松永の乱以降各地の戦火が収まる事なく日々激しさを増している。松永弾正久秀打倒を目的とした時には多くの戦国乙女達が力を合わせて戦ってきた、多くの人々が泰平の世が訪れると信じていたがそれは叶うことはなかった。

僕は松永様に才能を買われ側近として雇われたが謀反と同時に捨てられてしまい故郷に帰ろうとしていたところをヨシテル様に「行く宛が無いのであれば力になってくれませんか？」と言われて主を変えたあちら側としては松永について色々聞きたかったのだろう…

今では書状の管理や京の都内の警護に当たっている、御所や町では松永様に仕えていた事もあってか良からぬ噂を囁かれてる事も少なくはないが慣れと言うものは恐ろしく最初の1週間は来るものがあったがすっかり慣れてしまった。今も廊下ですれ違った侍女達が何かを言っていたが気にはしないしてはいけないと、そう思いながらヨシテル様の部屋の前に着いた。

『ヨシテル様、本日分の書状をまとめたので目を通して頂きたく参りました。』

そう言って部屋に入るとヨシテル様の姿はなく辺りを見回すと縁側の方で空を眺めていた。此方の気配に気付いてこちらを振り向いた。

「おや？魁（かい）、どうかしましたか？」

『その本日の書状のまとめたので目を通して頂こうと思いまして。いつもより数が多いので分かりやすくまとめておきました。』

「ありがとう、魁のお陰で私の仕事も随分と楽になりました。」

書状を受け取り目を通して行くヨシテル様しかし読み進む毎に表情を曇らせていく

「川中島周辺の村々の被害やノブナガ殿の駿河への攻撃…はぁ松永を打ち倒しても戦はなくならいのですね。」

『松永様と言う共通の敵がいなくなったと言うだけで結局振り出しに戻ったと言う方が正しいかと。』

「やはり話し合いだけでは駄目だと言うのでしょうか…松永のやり方が正しかったというでしょうか。」
　ヨシテル様はどんどんと悪い方向へと考えている。僕としては毎度書状の確認の度にこうなってしまうのだ、これもヨシテル様が泰平の世を思えばこそなのだろうが少々どころか自分の身すら省みない方だ、松永の乱以降自暴自棄のケが出てきている。こちらとしても見ていられないほどだ。
『ヨシテル様！』
「えっ!?どうしました魁そんな大声をだして」
　驚くヨシテル様の前に座り書状を取り上げた
『確かに今は大変な時かもしれません。でもヨシテル様は一人ではないのです、義昭様とミツヒデ様それにユウサイ殿もいます。都にいる人々もヨシテル様を慕っているんです。なので一人で抱え込もうとしないで下さい、僕自身も出来る事は少ないかもしれませんが力になります。』
「ふふ、魁の思いは伝わりましたよ。ありがとう。」
　ヨシテル様を励まそうと必死になって言葉を出そうとし笑われてしまった。正直恥ずかしいと言うか、ヨシテル様が笑ってくれて嬉しいと言うか…顔が熱くなっているのがわかる
『申し訳ありません！一介の家臣の僕が出すぎた真似を』
「良いのですよ。ならば早速魁には聞きたいことが幾つかあるのですがいいですか?」
　どうぞと返事をした次の瞬間ヨシテル様は凛とした表情でこう言った。
「あなたと松永の関係を教えてもらえますか?」
『わかり、ました。僕と松永様は…』
　断ってしまえば先程の言葉は嘘になってしまう、ヨシテル様はそれを見越してこの質問をしたのか…いや深く考える事はやめよう
　松永様と初めてあったのは、2年前僕の故郷である羽後の山奥で出会った。賊の噂を聞きつけ調査に来た松永様とは、村を出て狩りをしている最中に出会った。

「少年つかぬことを聞くがここらで賊がいると言う話を聞かなかったか？」
『え？』
　それが松永様との出会いだった、その時に『ここいらに賊なんていない』っと言ったのを覚えている。あの時の松永様様は少々疑っていただろう、なにせ猪を担いだ子供が山奥に入ろうとしているのだから疑われて当然だ。そうして賊の噂の真意を教えるために村に連れていった、松永様もあの時は驚いていたなぁ…村長に事情を話し誤解は解けた。
　その後だった松永様に共にこの国の安寧のために幕府に来ないかと言われた、君には私や私の主に無いものを感じるのだ！だから頼む！って頭を下げてまでお願いしていた。でも、周りの人々は反対してた。元服も迎えていない１３歳子供が村から出て国の為に働くなんて荷が重すぎるにも程がある。ただ村長や両親は違った地位や名誉等気にせずお前のやりたいことを見つけなさいって…
『そんな感じで今に至るわけで、幕府についてからは松永様に付きっきりで政務を教えてもらいましたね。』
「なんというか珍しいです。松永が頭を下げてまで貴方という人材を欲したのが…私が初めて見たときは義昭より少し年上の子としか見ていなかったのですが彼の目に狂いは無かったようですね、魁、貴方は十分に幕府の役に『違いますよ』」
「へ？」
『僕は、幕府の為だけではないですよ、松永様と最も親しいだけの関係の僕をヨシテル様や義昭様は受け入れてくれました。もしかしたら松永様の仇討ちのために謀反を起こしてしまう可能性があるかもしれないのに、いやする気はないのですが、だからお二人にはとても感謝しています。こんな疫病神に近い人間を置いてくれてありがとうございます。』
　たった少しの時間がとても長く感じる。風の揺れる音や鳥の鳴き声それすら鮮明に聞こえてくる静かな時間、今になって聞かれるとは思いもしなかった。

でもヨシテル様は他の人とは違う、僕がここで再び働く事になってからはミツヒデ様やソウリン様等、沢山の人に松永様の聞かれたが僕の言う事に疑い、威圧的に接する人が大半だった。しかしヨシテル様は違う、こんな話をして疑う事もない草原の風のように優しいのだ。

『えっと…ヨシテル様？』

感謝の言葉を言い頭を上げるとヨシテル様は涙を浮かべていた

「魁…私は、怖かったのです。松永が謀反を起こしたとはいえ、貴方にとっては家族のような存在のはずです。そんな彼を討ち取った私の事をとても恨んでいるだろうと思っていました。」

松永様の犯した罪は許されないだろう、しかしあの方はこの国の未来を思ってこその行動だった。そもそも謀反以前に争い続けている他の方々も罪人として裁いても良いはずだが、だが他の方々もそれぞれの目的や信念を持っている、織田様は天下の為、伊達様は打倒オウガイ様、武田様と上杉様は…お互いの力比べを楽しんでいるのかも知れない。

『確かに松永様を殺されてしまった事に関しては複雑な思いです。でも…』

言おうとした言葉を飲み込んだ、これを言ってしまえばヨシテル様との関係が壊れてしまう

「貴方の考えを言って良いのですよ、私は失礼を承知で松永の事を聞いたのですから」

『ヨシテル様は対話による和平を望んでいます。ですが…元来平和を唱えるものは強者が唱えてきたもので、松永様はこの事ヨシテル様に伝えたかったのです。理想を唱えるだけでは変えることは出来ないのです。』

「あなたもそう思うのですか、天下の為に民達が苦しんでも良いと言うのですか？」

『ではヨシテル様今の状況を考えてください、各国の将がそれぞれの目的で戦いをしているのです。僕が渡してきた書状には各国の状況を書いてヨシテル様も目を通しておられるでしょう、それに織田様や他の将達が戦を重ねていく度に兵力は増えていき最後には国全体で

争いが起こる可能性があるのです。その時の被害は今の状態の比ではありません。まさしく地獄と言えるでしょう…』
「猶予は刻一刻となくなっていると言うのですか」
　静かに頷いた
「しかし、私は…どうすれば」
　消えてしまいそうな声で語りかけた。
『僕も…』
「魁？」
『僕も行きます、貴方と一緒に戦いと言う覇道を』
「良いのですか？貴方は兵ではなく政務として過ごしていたのです。戦いをしたことなどないのでは？」
　確かにここ2年は、政務を中心に仕事をしていたため実戦をしていないユウサイ様はヨシテル様の補佐、ミツヒデ様は各地の情報収集等、乱世を終わらせるために皆必死だもちろん僕も御所での政務の大半を引き受けている。松永様の側近と言う理由で白い目で見られているのに、前線に立ちたいなど言ったら、謀反を企んでるのでわと疑われてしまうと言う理由で政務に専念していた。
『ここに来てから武道の鍛練は怠ってはいません。』
　そう言うとヨシテル様は考え込んでこう言った。
「では、私と手合わせしましょう。勝たずとも力を見せて私の隣に立つに相応しいか見極めさせて下さい。」
『わかりました。』
「明日の昼に修練場に来て下さい、他の者には私が伝えておきますので。」
　はいと返事をしてそのまま部屋を後にしたが、突然ヨシテル様の悲鳴が聞こえて戻って来たのはまた別の話

第二話　激闘

戦闘描写が上手く出来ているか不安ですがその前に
オリ主の詳細から
姓　？　　名魁（かい）　１６歳
　羽後の山奥で両親とひっそりと暮らしていた少年
松永との仲はかなり良好で周りからは理想の上司と部下の関係と言われるレベル。
　戦闘に関しては素手と法力（作中説明）を使う、戦うこと自体は山で熊や猪等を１０歳の頃から相手にしていた。今では鍛練はしていても実戦はしておらず、政務におわれている。
　亡き松永の死を無駄にしないためにヨシテル様に自分の思いを伝える決意をする。
　また７歳より前の自分の記憶が断片的に抜けているらしい

　ヨシテル様との手合わせの約束をした翌日、自分でもぐっすり眠れたと自覚している。政務は昨日の内に全て終わらせたので自分がヨシテル様に叩きのめされて暫く休んでいても大丈夫だろう、そう思いながら彼は床下に閉まってあった木箱を開けて中のものを取り出し部屋を後にした。
　日が登り初めてからは侍女や兵士達も目を覚ましそれぞれの持ち場につく、以前は自分の分食事を作る為に誰よりも早くに起きて厨房に行き料理を作っていた、普通は侍女達がやることなのだが自分の立場上頼み辛いのだ…
　しかも松永様や輝基様がいなくなってから幕府にいる男性は僕以外には義昭様しかいない、前に人形ようなしゃべる白犬を見つけ話しかけたら男だと言っていたがあれは夢だったのだろうか、いやそう思いたい。
　厨房で料理を作っていたことを知っているのは偶然通りかかった義昭様だけだあの頃の義昭様はまだ僕の事を怖がってあまり話そうとしなかった…　それでも挨拶や労いの言葉をかけてくれる優しい

方だった。仲良くなったきっかけもあの時だった。
『義昭様、おはようございます。』
「お、おはようございます。か、魁は何をしているんですか？」
明け方でも暗かったのもあり義昭様は驚いていた。
『自分の分の食事をと言ってもおにぎり７個ほど』
「７個だけですか!?」
『えっと何か？』
驚く義昭様に対して自分の反応は薄かった。確かにこの食生活に慣れるまで半月程かかった。
「いけませんよ！」
義昭様は、声を出して詰め寄ってきた
「１日をちゃんと過ごすためには食事はとても大事なんです！なのにおにぎり１種類で過ごしてるなんて…」
『あの義昭様…「いいから聞きなさい！」はいっ!?』
その後３０分位だろうか義昭様に説教をされた。まさか自分より３歳も下の子どもに怒らるなんて思いもしなかった。まぁ悪いのは１００％自分なのだが、それでもヨシテル様以外の人と会話するのはとても久しぶりだった。と色々と考えてる内に説教が終わった。
「良いですか、週に４回は私と席を共にしてもらいますからね。」
『はい…って、え？』
「ですから、これからは週に４回私と同じ場所で食事を取ってもらいます。」
とんでもないことになってしまった。ただ一介の政管が次期将軍と共に食事など…
『義昭様さすがにそれは！「魁は、一度した約束をやぶってしまうんですか？」…わかりました。』
「その、やっぱり迷惑ですか？」
瞳を潤ませてこちらを見上げてくる義昭様
さすがに断ることも出来なければ断った後が怖い、断らなくても後が怖いのだが。そもそもあんな表情をされたら断ること等出来ない！ヨシテル様の気持ちが分かったような気がする

『そのような事ありませんよ、喜んで同席させてください！』
「本当ですか！」
『はい、僕でよければ』
　パァっと笑顔になった義昭様が詰め寄ってきた。
「では、早速今日一緒に食べましょうっ!?魁はずっとおにぎりしか食べてなかったんです。他の食べ物も食べないと体に悪いですから…」
　こうして僕と義昭様は週に４回食事の席を共にすることになった
最初はお互いに遠慮がちで会話が上手く出来なかったり色々あった、たまにヨシテル様やミツヒデ様が一緒になることがあり最初は二人とも驚いていたが義昭様がヨシテル様に事情を話したらしく「では私も時間がある時は一緒に食べましょう！」と言い出して賑やかになった。そう思いながら廊下を歩いていると
「む、魁か」
『ミツヒデ様、おはようございます。』
「ああ、今日ははやいな」
『ええ、色々と…ミツヒデ様は義昭様の所へ？』
「そろそろ義昭様も起床する頃だからな」
　互いに言葉を交わして魁は道を開けた、通り過ぎたミツヒデ様がこう言った
「魁、お前もヨシテル様と同じように道は違えど泰平の世を目指す為に悩んでいた、そして今日それが動き出そうとしている。」
『僕は僕なりに考えて答えを出しました。後は今日の手合わせで決まります。』
　ミツヒデ様はフッと笑い
「そうか、なら私も今日は楽しみにしているぞ」
　そう言ってミツヒデ様は歩き出した。
　太陽が真上に登り周りの侍女や兵士達も昼の休憩に入り始めた、そんな中客人が来たと言うことで急遽自分が出迎えた
「魁さん！お久しぶりです！」
「ご無沙汰しております。」
『大友様、立花様お久しぶりです。』

二条御所を訪れたのは豊後を治めるキリシタン大名こと大友ソウリン様と家臣の立花ドウセツ様だ。
大友様は度々御所に来てはヨシテル様と義昭様の話相手になってくれる人だ、立花様は松永の乱の時に松永様に操られていたカラクリ人形？なのだが今では大友様とは家族と言えるほどの間柄だ
『ヨシテル様と義昭様は今一緒に昼食を食べています。お二人はお済みになりましたか？』
大友様が「是非」と言おうとしたその時
「お～ほっほっほっ！今川ヨシモト参上ですわっ!!」
今度は駿河を治めている今川様が訪れた。
『今川様、本日伺うという話は聞いていなかったのですが、どのような御用事で？』
「魁さんは何もきいてませんの？」
今川様は首をかしげながら聞いてきた
話を聞くと今川様は、絶賛攻撃を受けている織田様の事で一度話をしたかったらしい、昨日御所から駿河へ使いの者が送られてきたそうだ、徳川様は大事な客人が来ているとのことで一人できたらしい。
3人をヨシテル様の元へ案内した後、自室に戻った。
閑話休題
～修練場～
「魁、準備はできましたか？」
『はい、ですが…緊張します。』
修練場にいるのは義昭様とミツヒデ様に来客の3人、それ以外に兵士達まで来ている、そもそもこの戦国の世は男の武将なんてそんなにいない、松永様や奥州の片倉様といるにはいるのだが男の兵士等、僕以外いるのかと言うレベルだ。
「では準備が出来たらいつでも攻めてきてください」
「魁さーんふぁいとですっ！」「魁殿も体術で闘うのですね」
「殿方が戦う姿なんてあまり見ることがないのでとても新鮮ですわ」
大友様達が声援等を送る裏では「このまま死んでくれれば…」等の声もある

「魁どこからでもかかってきなさい！」
　そういわれ魁は急に肩の力を抜きジャンプをし始めた、周りがいつ攻めるのかと静まりかえるなか淡々とジャンプを繰り返している
「どうしたのでしょうか、ドウセツさん何かわかりまして？」
「いえ、あのような動作何の意味があるのか…」
　２０回は超えた所でさすがのヨシテル様も痺れを切らしたのか魁に声をかけようとした次の瞬間
「っ!?」
　足が地面に着いた瞬間物凄い速さで膝蹴りを胸部目掛けて放ったが左腕で防がれてしまった。その後足払いをして転倒させようとしたがヨシテル様は最低限の間合いを取りながら後退し、その瞬間に抜刀した、刀に手を掛けたの見て後退し紙一重でかわしたが刃先が目の前を通り自分の前髪が少し散った。
「逃がさん！」
　そのままヨシテル様は間合いを詰めどんどん切りかかってきた、魁は避けるので精一杯でただひたすら後退していた。
「どうしたっ、魁!!何故逃げる!?」
　いつも皆に向けている優しい笑顔は消え、鬼気迫る勢いで問いかけてきた
「あの時お前は私に今のやり方では泰平の世を目指すことなど出来ないと言った！それを承知で今私の前に立って戦う事を選んだお前が逃げては意味がないだろうっ！私に考えを改めさせると、お前の考えを通したいと言うなら戦えっ!!!」
「たぁぁぁぁぁぁっ！」
　怒号を込めて鬼丸国綱で振り光の斬撃が魁に直撃した。
『はぁっはぁあ、うぐっ』
　吹き飛ばされて立ち上がった直後に腹部に衝撃が走った、ヨシテル様の膝蹴りを喰らってしまったのだ、そのまま攻撃をかわす為に後退を続けていったが遂に塀に背中を背負ってしまい追い詰められた。
「終わりだ！」
『うわぁぁぁぁぁ』

「っ!?炎」
魁の振った拳には炎が纏っており斬りかかろうとしたヨシテル様は驚いて後退した。その力にはヨシテル様だけでなく周りも驚いていた。
「何なのですあれは!?」「私も知りません、ドウセツは？」　「私にもわからないです。」
「あれは法力という神秘の力にございます。」
周りが騒然とする中、細川様が口を開いた。周りのもの達が話を聞く為細川様の方を向いた
「法力とは自然の理の４つの水・土・風・炎そしてそこから派生した雷・氷・光・闇があり、それらは無から有を生み出すと言われています。簡単に言ってしまえばノブナガ様ですかね、あの方が天下布武から出されている炎も法力と似たような物です。」
「似たような物と言うことは魁とはどう違うのですか？」
一通り説明を終えた細川様にミツヒデ様が質問した、その質問に周りも頷いている
「彼の場合、戦国乙女達が武器から放出している法力を体内にとりこみ放出している、いわば彼は自然を体に宿している様なものなのです。ですが…それぞれの属性を使うには尋常では無いほどの鍛練や勉学が必要ですが」
「なかなかピンと来ない話です。」
今の説明でも今川様や周りの者達も納得しきれてない人が多数だ
（良かったです。私以外にもわからない人がいて）「ソウリン様考えていることがバレバレですよ…」
「そ、そんな事無いですよドウセツ」
「では続けましょう。例えばヨシモト様の裂空真空波に氷と炎の法力を使うとしましょう、前者は氷の矢と矢によって生じる風は極寒の大地と同じ冷たさを、後者は炎の矢と後に襲う熱風、野に放てば草木は燃え焦土になるでしょう。」
興奮気味にユウサイ殿が話す
「おぉー!」という驚く声をよそに二人の戦いは激化していく一方だ

「魁、あなたの力は確かに本物です。ですがそれはまだ先の話であって今ではない、だから…」
　観客はユウサイ殿の話を聞いてあれやこれやと盛り上がっているその時のとてつもない轟音が起きた、皆が振り向くと地面に頭を打ち付けられうつ伏せになっているヨシテル様と仰向けになっている魁がいた。それを見た皆は何が起きたか分からずにいた。
　数分前
「炎を出せるのを隠していたのは驚きました。ですが」
『っ！』
「あなたが敗れるのは代わりありませんっ！」
　そう言って刀を振り下ろしたがほんの一瞬何かが弾ける音と共に魁が消え次の瞬間
『これがぁっ！』
「後ろっ!?」
『僕の力だぁっ!!!!!』
　ヨシテル様の後頭部を掴みそのまま地面に叩き着けたのだそして今に至る
「まさか炎だけでなく雷の力も使えるとは、でもこれで終わらせます。」
『はい』
　正直このまま続けてても消耗戦になって一方的に攻撃されるだけだならこのまま互いの出せる最大の一撃で終わらせた方が早い。ヨシテル様も刀を納め居合いの構えをとったそれに答えるように構える
「ヨシテル様は雲切を出す気ですね」
「あの、ヨシテル様の必殺技は分かるのですが魁さんって必殺技は使えるんですの？」
　唐突に今川様が尋ねた質問に対して周りは「あっ」と声を出した
「私も魁とは何度かゴタゴタに巻き込まれ共闘をしましたが一度も技を見たことが無ければ、あのような力すら出していなかった。」
「そもそも男性の方が戦うと言うのはあまり見たことがありません

し」
（明らかにヨシテル様の雲切に勝つことなんて無理に等しい、でも一つ、活路があるとしたらあれしかなかった、何回も頭の中でイメージし続けたがこれしかない）
「天剣一刀」
『我流ノ型』
（地面に両足を埋めてそのまま腹に力を込め右手を腰の横に、その上から左手を被せる身体中から法力を取り込み右手に集める後は当てるだけでいい）
「雲切!!」
『…』
　ヨシテル様がこちらに駆け居合いを打ち込んだ、誰もが決まると思っていた勝負、しかしまだ終わってはいなかった。
『ぐ、痛ぅ…』
「か、魁っ!?」
　そこには雲切が放たれ鬼丸が横腹に入ってもなお立ち続けていた僕の目の前には鬼丸を握り続けてるヨシテル様がいる、その光景に周りは唖然としていた。
『両足を地面に埋めたのは土の力を取り入れやすくして雲切の衝撃を押さえる為です。』
「だからと言ってそんな危険な方法で防ぐは間違っています!」
　至近距離で話し合っているためヨシテル様の装束の至るところに僕の血が付いてしまっている、作戦上とはいえ正直申し訳ない気分になってしまう
『たしかに…間違ってる、かも、しれないです。だから、ヨシテル様』
「え?」
　身体中の血が抜けているからか呼吸が辛い、でも僕にもやることはある、ここまでが作戦の一部ヨシテル様の腕を掴み雲切を受けても右手に貯めたこの一撃を喰らわせるのが目的なのだ
『目には目を、歯には歯をって言葉、知ってますか?』
　その言葉を聞いた瞬間ヨシテル様の顔は青ざめていた

「ま、待ってください!?魁は怪我をしているのですよ、そこら辺のじ、自覚を持ってください。早く治療しま『問答無用ッ！』」
『必殺！爆炎の一撃!!』
ヨシテル様の胸郭に放った一撃は命中すると同時にとてつもない爆音と共に爆発した、爆音事態はとても小さい範囲だがヨシテル様を彼が背負っている塀の壁の反対側まで吹き飛ばすには十分な一撃だった。だが技の破壊力＝体力の消費に繋がるため魁は腹部に鬼丸が刺さったまま気絶した。
「か、魁っ!?」
ヨシテル様や周りの者達が駆け寄った
「姉上、魁は助かりますますよね!?」
「義昭様近づいてはなりません！御召し物が汚れて」
「そんな事より早く誰かお医者様をっ!?魁が死んじゃいます！」
「私達が呼んできます！行きましょうドウセツ」
「御意！」
「刀を抜かずそのまま止血しますわね」
周りがとても騒がしい、記憶も曖昧でよく分からないが多分僕は負けたんだと思う。鬼丸が刺さって痛いし、呼吸も辛い、正直もう起きてるのも辛い、もう休もう俺は届かなかったんだ。
「ヨ、ヨシテル様何を」
今川様が止血をすませてヨシテル様は気絶している魁を持ち上げた
「魁を一度私の部屋へ連れていきます。ヨシモト殿申し訳ないのですが魁の着替えを持ってきてもらってもいいでしょうか？」
「わかりましたわ！」
「魁、姉上…」
二人を見つめる義昭様はミツヒデ様と共に自室に向かった、他の者達もミツヒデ様の指示で解散となった。その中で不適な笑みを浮かべている一つの影の存在をまだ誰も知らない
「魁…貴方は何て無茶をするんですか」
魁を抱えて自分の部屋に向かっているヨシテル様、白の戦装束は彼

の返り血や攻撃によって焼け焦げた後など、二度と着ることが出来無い程汚れていた。
『ヨシ…テル様』
「魁？」
『僕、つよ…くなりま…すから。』
気絶しながら無意識に発した言葉だった
「魁…ごめんね」
そう言ってヨシテル様は止めた足を再び進めた

第三話　想い

二人の立ち合いから3日が過ぎた、魁はまだ眠り続けたままだった、あの後大友様・立花様・今川様は一度自分の領地に帰って行った、三人ともまた来るとの事だ。医者によれば出血が酷いらしく起きても暫くは絶対安静らしい、元々魁の部屋は御所内では経年劣化が見てきた区域の部屋だったため軽い改装を含めて、ヨシテル様の部屋で休んでいる、医者やミツヒデ様からは部屋を用意すると言ったがヨシテル様は自分が怪我をさせてしまったと責任を感じている。

「ヨシテル様、失礼します。」

ミツヒデ様が部屋へと入ってきた、ヨシテル様は日中の仕事は魁の部屋を借り、食事や就寝は義昭様の部屋で取っている。この事に関してヨシテル様は、義昭様と過ごす時間が少し増えて魁には申し訳ないが嬉しく思っている。

「魁はまだ目覚める気配はないですか？」

「ええ、呼吸は落ち着いているのですが、やはり出血や体力の消耗が激しかったようです。」

「そうですか…」

前と変わらない報告を聞いて落ち込むヨシテル様、自らの手で魁を傷つけてしまった責任の他に彼の部屋で執務をしている内に様々な事が分かっていった。

「魁はいつも私の元に報告書を持ってくる時、ソウリンが前に持ってきた南蛮の書物よりも少し薄い位の量でした。私は魁の仕事量はそんなに多いものではないと思っていました…」

そういいながら部屋の棚を見渡した、棚には隙間が無くほとんどが本として書き写された報告書や予算表だ自分の趣味として読んでいる本は２０冊程しかない

「魁がちゃんとまとめてくれているお陰で私達の負担も少なくなっていたんですね」

「はい、魁殿は魁殿なりの考えで私達の役に立とうとしてたんだと思います。」

「私も…考えを改めなければならないのかもしれませんね」
　そう言って目を閉じて意を固めたヨシテル様
「ありがとうミツヒデ、今日の仕事はこれで終わりましたのでお互いゆっくり休みましょう。」
「はい」
　閑話休題
　ヨシテル様の部屋では魁の様子を見に義昭様が来ていた
「義昭来ていたのですね…」
「姉上」
　ヨシテル様は義昭様の隣に座り眠っている魁を見つめた
「今日は魁と一緒に食事をする日でしたので、魁が起きていたら一緒に食べましょうって言いたかったです。」
「皆驚いていましたよ、人前に出ることの無かった魁が貴方と食事を共にして、魁の笑みを見ることが出来たんですから」
「私も魁のはにかんだ笑顔は今でも覚えています、何と言うか凄い優しい雰囲気が出ていて、何気ない事やお互いの事を話し合ったりして食事を終えた後でも魁は私の相手をしてくれました。姉上やミツヒデが忙しい時には勉学を教えてくれたり、外に連れ出してくれました」
「まるで兄弟みたいですね」
「魁がそれを聞いたら倒れてしまいますよ」
　クスクスと笑いあっているとミツヒデ様が部屋へと入ってきた
「御二人共食事の準備が出来ました」
「ありがとうミツヒデでは義昭いきましょう。」
「はい」と返事をして義昭様は部屋を出たヨシテル様は部屋を出る前に魁の方を振り向いた
「魁が目を覚ますのを皆待っていますからね」
　そう言って部屋を後にした
『…ここは？』
　気がつくとそこは青々とした草が生い茂る草原だった風がふくた

びに草木は波のように揺れ空には白い雲と青空が広がっている
『僕は確かヨシテル様の雲切で…』
　自分の頭の中を整理する、僕はあの後ヨシテル様に持ち上げられたのは覚えている、ただこの草原は行ったことも、見たことが無い
『死んだのか…』
「そんなわけ無いじゃないか」
　声の聞こえる方に振り向いてみるとそこには袖の長い白と青い色の着物を来た女性がいた
『あな「あなたは？何て言うとは私の事を汚しておいてよく言えるなぁ」』
『なぁっ!?』
「そうだろう君に乱暴に入れられたせいで私は血に染まってしまったんだからな」
　よよよ…と言いながら口元に手を抑えている
『あの何と言うか覚えが無いのですがごめんなさい、僕自身会ったことも覚えていない人に酷い事をして本当にごめんなさい』
「うん、覚えてなくて当然さこうやって会話するのは初めてだもの」
『へ？』
　魁の謝罪に対して何事も無かったかのように振る舞っている、その言葉に対して魁は声を出さなかった。鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をしていた。
「はははははははっ！」
『騙したんですか!?』
「ごめんごめん、まさか信じると思ってなかったからw」
　謝りながらもまだ笑っている女性は落ち着くと改めて魁にこう告げた
「改めてましてだ、こうやって会って話すのは初めてだね魁、ここは君の精神いわば心の中だ。今私はここでしか話す事が出来ないから君の意識を縛り付けて会話を試みようとしたが君が目を覚ますのに時間が掛かってね…まぁその分色々調べることが出来たけど」
　心の中かそれなら合点がいくこの心地良さが何よりの証拠だ、多分

この人は俺の一番落ち着く世界をイメージしているのかもしれない
「自己紹介がまだだった、私は国綱だよ」
『国綱？ってまさか！』
「君の予想は当たっているよ、そう鬼丸国綱の思念さ!!」
　目の前にいるのはヨシテル様のもつ愛刀であり天下五剣のうちの一つ鬼丸国綱だ足利家に伝わる家宝の一つであって強力な霊気を秘めている刀だ意志があってもおかしくない
「いやはや君のその真っ直ぐな所はからかいがいがあって良い、私の主に一矢報いる事が出来たのも頷ける。」
『でも肉を断っても骨は砕くことは出来なかったですけど』
「まぁそう気を落とさないで、私としては主の頭を思いっきり地面にたたきつけたところなんか上出来さ」
　気を落とす僕に励ましの言葉を掛けてくれているのは嬉しいのだが聞きたい事は色々ある
『あの、どうして僕に会いに来たのでしょうか？』
「まぁそこは気になるわよね、いいわ君の聞きたい事を全て教えてあげよう」
「一つ目は何で君に会いに来たから、これは理由が二つあるから一つ目ね簡単に言うと君が主との立ち合いで私が刺さり、大量の霊気が君の体に流れ込んだのが原因だ」
「二つ目は、君の体質が気になったからだ何せ法術に必要な自然エネルギーを自分の肉体に取り込む事が出来る、しかも私の霊気も例外ではなかった。」
『えーとそれってつまり』
　考えられることは一つ僕が取り込んだ大量の霊気それは鬼丸国綱本人が吸い込まれてしまったという事なのだ、だから彼女は此処にいるそう考えるのが自然なんだ
「その様子だと結論にたどり着いたようだね、君は頭がいいなぁお姉さんが撫で撫でしてやろう」
　そう言って彼女は後ろから彼にしがみつき頭を撫でた
『あの恥ずかしいです鬼丸国綱殿…』

流石に撫で続けられて顔が赤くなっていく
「そんな他人行儀はやめて国綱と読んでくれたまえ」
『で、でも』
「呼んでくれるまで撫でるのを止めないぞぉ～」
『わ、分かりましたから撫でるのを止めて下さい国綱さん！』
「やはり君はからかいがいがある、その弄られ具合はもはや天性の物だ」
そう言いながら魁を離した
『そんな不名誉な物入りませんよっ！』
「ははははごめんごめん、まぁ話を戻すと君が目を覚ますまで私自身閉じ込められていて、暇潰しに君の記憶を調べていく内に興味が出てこうして本人と話そうとおもってた。」
そうやって話し込んでいる内に魁の体が光だした、理由は一つだここが魁の精神の中ならこうして意識を取り戻したと言うのなら肉体の方も目を覚ますと言うことだ
『何と言うか楽しかったです。』
「私も同じだよ、主の事ちゃんと支えてやってくれ私自身が君の力になれることは少ないがあちらでもよろしくね」
そう言って国綱は手を振って光に包まれて消える魁を見送った
「魁、君はこれから沢山の戦いを経験していく、その中で自分の運命の分岐点に直面するけどきっと…いえ君は喜びや悲しみ時には絶望する事だってある、でも主や義昭にミツヒデ、色んな人達と出会いを重ねて真っ直ぐに育ってくれ」
そう言って国綱も光に包まれて消えていった、この景色を形作った本人が居なくなった草原は後少しすれば消えるだろう、だが風や波の様に揺れる草木はまた何処かで感じることが出来るだろう、草原を渡る風は一度愛した者を見放しはしないのだから

翌日、日も真ん中の位置まで上った頃全ての政務を済ませ魁の寝ているヨシテル様の部屋へと向う義昭様、途中ヨシテル様、ミツヒデ様と会い一緒に向かった。

「魁、起きていますかね？」
　義昭様がヨシテル様に訪ねた
「お医者様によるといつ起きてもおかしくはないと言っていたので、やはり魁の回復次第かもしれません。」
「そうですか…魁が起きたらまた一緒に食事をしたかったのですが」
　そう言いながら廊下を歩き続けヨシテル様の部屋の前に着き襖を開けた
『えっと、おはようございます。そのどうして僕はヨシテル様の部屋で寝ているのでしょうか？』
　そこには目を覚まし布団の上に座っている魁がいた
「「魁っ!!!!」」
『え？は、はいっ！』
　三人に自分の名前を呼ばれ返事をしてしまった。いや国綱の言うとおりなら多分長い間眠っていたから心配してくれたのだろう、しかし僕を休ませるにしてもヨシテル様の部屋に連れて行かれていたとは…
「良かったです。ずっと起きてくれなくて、僕てっきり死んでしまったかと」
「お主と言う奴は皆にどれだけ心配を掛けたと思っているのだ、本当に目覚めてよかった。」
　二人とも小粒の涙を浮かべながら僕の元へと詰め寄ってきた、あの時自分のやった事が原因というのもあって罪悪感がある
『二人とも本当に心配かけてしまいすいません。それにヨシテル様も』
「…」
　ヨシテル様に話かけても返事がなかった。
（あの様な事をしてしまったんだ怒っているのは当然だろうなぁ、ここはちゃんと謝罪をしよう）
『あの、ヨシテルさ「馬鹿っ！」』
　ヨシテル様が凄い勢いで抱きついてきた、魁の顔の横で「馬鹿ぁ」と泣き出しそうな声で更に強く抱き締めてきた

『ヨシテル様、ご心配お掛けてしてごめんなさい』
今回の件で一番悲しませてしまったのは他でもないヨシテル様だ、今の僕に出来る事と言えば…
そう言って魁はヨシテル様を抱き締め返して頭をなでた
「本当に魁は大馬鹿です。御所で周りの者達の態度なんか気にしなくていいんですっ！松永の部下だったから何なのです！魁は魁のままでいいのですよっ!!松永の事をずっと慕っていたって構いません！だからって貴方は人に頼らないでずっと一人ぼっちで過ごして…そんな辛い道をずっと歩き続けて、辛かったですよね？」
涙を流しながらヨシテル様は自分の思いを打ち明けた
「ごめんね、ずっと気付いてあげられなくて」
『…そんな事ないですよ、ヨシテル様』
「魁？」
『僕はヨシテル様に「ここにいても良い」って言われた時、とても嬉しかったんですよ、松永様がいなくなって居場所が無くなった僕にヨシテル様はちゃんとここにいても良いって、義昭様やミツヒデ様も僕と食事の席を共にしてくれました。だから僕はヨシテル様と義昭様についていくと決めたのです。』
僕とヨシテル様、2人の思いを打ち明けあっていくヨシテル様だって話を持って天下を結ぶそんな事、無理に等しいと感じていても最善の道を選んだ、だからと言って僕はそんな事許さない、主君一人が辛い思いをさせるのは家臣としてはあってはならないんだ
「ありがとう、魁。お陰で胸の内が楽になりました。」
『こちらこそ本音で話してくれてありがとうございます。』
そう言ってヨシテル様の頭をなで続けていたらミツヒデ様が咳き込んだ、義昭様も頬を赤くしてうつむいている
「お二人共その様な事をされては困ります。それに魁は家臣なのですからちゃんとした距離感をわきまえてください」
徐々に頬を赤らめていくミツヒデ様の言葉と共に二人も自分達のしている事の重大さに気付いて離れた
「えっと姉上と魁も皆でご飯を食べましょう」

「そうですね／／／今日は４人で食べましょう…ね、魁　」
『はい／／／』
　そう言って４人は部屋を出て義昭様の部屋に向かおうとした
『？、風か…』
　ふと小さく風を感じた魁は何かを思い出した
（国綱さん、僕は精一杯ヨシテル様を支えていきます。ですからこれからも近くで見守っていて下さい）
「魁～、おいていきますよぉ～」
　廊下で立ち止まっている魁にヨシテル様が呼び掛けた
「はーい！」

第四話　すきんしっぷは大事です…

僕が目を覚ましてから1週間がたった。
法力の力の影響かそれとも国綱さんの霊気によるものか傷口は完全に治っていた。幼い頃から父さんと法力の特訓をしていたが　仕組みのことしか知らず、なぜ使えるのか等全く知らないそれが神秘の力と呼ばれるのかもしれないのだろうが…
それでもお医者様やヨシテル様や義昭様は政務は暫く休んで下さいと言われていた。この1週間街を歩いたり、何もせずゆっくり過ごしたり、暇を見つけては義昭様が部屋に来てくれて一緒に外を歩いたりした。

『ヨシテル様、魁です。』

「はい、どうぞ入ってください。」

そう言われヨシテル様の部屋へと入った、文机の書類を片付けた後机を端へと寄せ正座していたので、自分も正面に正座した。

「今日は大事な話しがあって呼びました。何か判りますね?」

『はい』

「私があなたと手合わせしたのは、覚悟を示して欲しいと言いました。」

『やっぱり駄目…ですか?命を投げ出すようにするのは』

あの時の鬼丸国綱を体で受け止めて攻撃する手段は、「肉を切らせて骨を絶つ」と言えば聞こえはいいかもしれないが、あの時は無謀に近い賭けだった、僕のした行いは、対話による泰平の世を目指すヨシ

テル様の理想とは程遠い行いだ。

「確かにあの様な危ない真似は控えて下さい、私や義昭達の身が持ちません、貴方はもう此処には無くてはならない存在なのですよ。」

『そんな事』

「ありますよ、だって義昭があそこまで心を開いているじゃないですか、私が仕事で会えない日は義昭との約束に関係なく、食事を共にしてくれたではありませんか」

『バレてたんですね』

「義昭が嬉しそうに話してくれました。最近では勉学を教えてくれるようになった言っていましたよ。」

最初は食事を共にするという約束だけだったが、食事を終えて部屋を出ようとした時、寂しそうなの表情の義昭様見ていられなかった。将来幕府を治める将軍としてでは無く一人の子供なのだ、家族や親しい人と仕方無いとはいえ日常の中で全く話せない日もある、それに自分も親しい人と話せないという苦痛はよく知っているだから放っておけなかった。

「魁は優しいのですね」

そう言って僕に優しく語りかけてくれる、この方はいつもそうだ暖かい心の世界で国綱さんと会った時の雰囲気に似ている、あの時御所を出て故郷に帰っていたらこんな感覚は知ることは無かったと思う。

『ヨシテル様にそう言われて嬉しく思います。』

「話がそれてしまいましたね、単刀直入に言うと魁の提案を受ける事

に決めました。」

『ほ、本当ですか！』

「ええ、私もずっと悩み続けてきましたが答えを出すことが、ただ話合うだけでは駄目だと、力を、そして想いをぶつけなければ行けない魁との手合わせで理解出来ました。」

武人とははそういう物なのだ、言葉には無い想いを自分の力や技に乗せて戦う一言で言うなら不器用な人間なのだ…その代表的な人物が松永様だ、確かに天下を支配する為に立花様を利用するなどの悪逆を尽くしてきたが最終的には争いを無くし力による泰平の世を望んでいたのだろうか…まぁ本人が死んでしまって真意は聞くことが出来ないが

「魁が休んでる間、魁の部屋の書類を全て拝見しました。その中にこの書類が」

表紙には「極秘」という題とその下に、ヨシテル様・義昭様以外の者が開けた場合、げんこつ１０発と書かれていた。

「各々の武将による代表戦、これが貴方が出した最善の結論ですね」

『はい、広い土地を必要としますがこれが大規模な戦をしないで済む方法だとおもってます。他の方々か納得するか分かりませんが天下統一を掛けた戦いなら黙ってないでしょう。』

ヨシテル様は何も言わず頷きながら聞いてくれた

「では、一度各地へ伝令を送りその後に日程を決めましょう。」

『わかりました。では』

「あぁ、魁待ってください。」

早速、書状の用意をしようと部屋を出ようとしたらヨシテル様に呼び止められてしまった。

「貴方の部屋、というより御所の一部の改修しているので完了するまで執務は無いですと言うより暫くは休養に専念してください。」

『どのくらいですか?』

「そうですねぇ…代表戦が始まるまでです。」

『長いですね…』

「今まで休まずに働いてくれたのです、三ヶ月程休んでも問題ないですよっ!」

笑顔で答えてくれるヨシテル様の言葉とは裏腹に自分の中では複雑な思いが渦巻いている、自分の今までやり続けた仕事は誰でも出来てしまう程簡単だったのかと不安になってしまう

「不安にさせてしまいましたか?」

『い、いえ』

僕の表情見たヨシテル様が察したのだろう

「魁が思うような心配はしなくても大丈夫ですよ、それに魁が丁寧に書状をまとめてくれたから他の人に任せることが出来るんですから、

それにあなたには私の補佐とを頼みたいのです。」

『わかりました。』

「では魁には、姓をあげなければいけませんね」

『そんな僕には勿体ないですよ…』

姓とは高い身分や地位を表す言葉だ、元から名字の無い自分には無縁だったが

「遠慮しないでもいいのですよ」

『いやだからって名字も何も無い自分が貰うのも』

そんな押し問答を繰り広げるなかヨシテル様は冷たい様な言葉でこう言った

「へぇ…では魁は名字があれば問題ないのですね。」

『え？』

「ふふふ」と不敵に笑うヨシテル様は次の瞬間とんでもないことを言った

「では、今日から〝足利　魁〟と言う名前になって私の事をお姉ちゃんと呼んでくださいね♪」

『すいません、許して下さい。』

この言い合いはヨシテル様の完全勝利で終わった、流石は将軍であ

る

「それに魁は私の補佐になるんですからちゃんとした身分を持たないと周りから白い目で見られてしまいますよ。」

『それは困りますね…』

只でさえ白い目で見られてる今これ以上周りとの溝を深めてしまうと此方の胃が持たなくなってしまうからなぁ、と言うか姓を受け取らなかったら逆に義昭様やミツヒデ様に怒られてしまいそうだ。

『ヨシテル様、貴女がつけてくださった姓を謹んで頂戴します。』

魁は深く頭を下げて感謝の言葉を言った

「そうですか…では貴方の姓と名字は「四輝(しき)」、四輝　魁です。」

ヨシテル様が「季節の四季とかけてみました!」とえへんと胸を張って言った。

「私と魁が手合わせをした時に魁がほうじゅつ?と言う力を使った時に雷は青、風は緑、炎は赤と色々な霊気を纏っていたと義昭が言っていたので、私の名前の「輝」を貴方に託しました。私と義昭二人で考えたので自信がありますよ!」

『その…ありがとうございます。』

「魁の笑顔久しぶりに見ました」

ヨシテル様の言葉に驚いてしまった、自分がそんなに無愛想な人間なのかと疑ってしまう。

「いえ魁が無愛想と言うよりは、私達の前では事務的な対応を取ることが多いのでとても珍しいのですよ、それに一部の侍女や兵達も基本的に無愛想で近寄りがたいと言っていましたし」

『そんな事いつ聞いたんですかっ!?』

「魁が寝ている間ですよ、手合わせの時に魁の陰口を聞いたと言う者がいたと今川殿が言っていましたのでこの際御所内の魁の印象を聞いてみようと思ったのです。」

僕が眠ってる間にそんな事をしていたとは、ヨシテル様の行動力が半端無いと言うかそこまでしてくれると自分自身が御所の人々との交流を怖がっていたと言うものあるが、それを疎かにしていた事が恥ずかしい

『本当に何もかもありがとうございます。』

深々と頭を下げて礼を言って、顔をあげるとヨシテル様の顔が目の前にあった、驚いて下がろうとしたがヨシテル様が頭の上に手を置いて撫で始めた

「前も言ったように魁は周りを気にしすぎですよ、もう少し楽にしていればいいのですよ」

『でも僕は…』

「ですから、私は気にしていませんよ義昭とミツヒデだって同じ事をいいます、だから周りを頼ってください貴方は一人で何でも背負いすぎですよ。」

『わかりました、僕自身これからき「気をつけますではなくちゃんと頼ってくださいね」』

はい、と返事をした瞬間ヨシテル様は再び頭を撫で始めた、こう言うのは誰かに見られると流石にマズいのでやめて欲しいと言ったら

「魁は私にこういうことをされるのは嫌ですか?」

と軽く泣きそうな声で言われてしまい断るに断れない、ヨシテル様が満足するまで他の人が来ないことを祈るしかない

「ヨシテル様ーっ!今日は南蛮のおかし、を」

「どうしましたソウリン様そのような所で固まっ、て」

お約束と言うのかこう言う時に限って人の想いは裏切られるのだ、しかも弁明が聞く義昭様やミツヒデ様ならまだマシだったが

「ほほう、お二人共なかなかやりますね」

「か、かかかか魁さんっ!?ヨシテル様もっ!!白昼堂々な、何をしようとしているんですっ!!!!」

案の定こうなる、立花様は何かを察してにやにやして、大友様は顔を真っ赤にして声を荒げて詰め寄ってきた

『大友様これh「いいじゃないですかぁ~こうやってスキンシップしているだけなのですから♪」ヨシテル様っ!?』

大友様の顔は更に赤くなりとうとう「ボンッ」と頭から煙が出て座り込むように崩れ落ちて気絶をした

「ヨシテル様、お二人をからかうのも程々にしましょう…」

「ふふ、魁の慌てる姿を見ているとつい」

立花様が「その気持ち分かります」と言う顔をして頷いたそうしてヨシテル様とくっついている僕の方に近付きヨシテル様と同じように頭を撫で始めた

「魁殿に申し訳無いですが、私もすきんしっぷと言うのをしましょう」

『立花様まで、やめてください』

「いいじゃないですか、ドウセツも魁の撫で心地の良さを分かってくれますよ 」

「そうなのですか?では魁殿の撫で心地を堪能させて貰いましょう」

そう言って二人は僕の頭を撫で始めた、ヨシテル様は時々頬を撫でたりしている、立花様は優しく、時折強く撫でたり指の間に挟めて櫛ですくように感触を確かめている、立花様は「これは…」や「なるほど」等と呟きながら撫で続けている

『あのお二人共…そろそろ』

「ヨシテル様が気に入るのが分かります。魁殿の髪の触り心地は癖になりそうです。」

「分かりますか、ドウセツ!この指に挟んで撫で下ろして行くと最後にはスゥっと離れて行く感覚がまたいいのですっ!!」

僕の願いをよそに二人は撫でるのをやめなかった

「魁殿はもっと髪を伸ばしてもいいと思いますよ、藍色の髪の毛がより綺麗に見えますよ」

『そう、でしょうか』

「そうですよ！魁も私やドウセツの様に腰辺りまで伸ばしたら凛々しくなります！」

『お二人が…そういうなら』

その後ミツヒデ様が報告に来るまで二人に撫で回された

「先程はすみませんでした。」

『いや、悪い気はしなかったのでお気になさらないで下さい。』

大友様はヨシテル様と二人だけで話をしたいとの事だったので立花様と城下町に出ていた、町はいつも通り賑わっており戦乱の最中とは思えない程だ。

「四輝（しき）と言う姓は、魁殿にぴったりですよ」

『自分には勿体ない位ですけどね…』

「謙遜しないで下さい貴方は姓を貰うにあたいする覚悟を見せたのです、それに貰える物は素直に貰っておくべきですよ」

多分大友様の事を言っているのだろう

『ありがとうございます、立ば「ストップです！」』

「魁殿はヨシテル様の側近とも言える立場にいるのです、私の事も名前で読んで下さらないと示しがつきませんよ」

『え、とわかりました、ド、ドウセツ殿』

「はい」

こうして名前を呼ぶのは言いが道の真ん中でやり取りをしていたため、気付いたら周りの人達の注目を集めてしまった。

ドウセツ様も少し頬を赤らめていた

「若いわねぇ」

「魁様もすみに置けないなぁ」

老夫婦が二人をみて話していた

「かいさまとからくりのおねえさんラブラブだ～」

女の子にもからかわれる始末…

『ドウセツ殿、行きましょうっ！』

「あ、魁殿っ!?」

流石に居づらくなったのでドウセツ殿の手を引いてその場から走り出した、途中すれ違った人々から黄色い悲鳴があったが聞かなかった事にした。

御所前

「魁殿も強引な所があるのですね」

『流石に恥ずかしかったので』

そうして話していると御所から突然今川様が現れた

「お二人とも随分早いお帰りですわね」

『い、今川様今日はどうしてここに、わっ!!ドウセツ殿急に目を覆って何をって今度は抱き上げて何を!!!?』

「説明は後でしますのでついてきてください」

ドウセツ殿に目隠しをされ更にはお姫様抱っこをされて何処かに運ばれて行く、一体何が始まるのか不安で仕方がない

つづく